

Ⅱ B-9 単剤治療下の患者動態

岡山大学・神経精神科

国立岩国病院・神経科*

高橋 茂, 江原 良貴, 細川 清

久郷 敏明*

近年、抗てんかん剤の血中濃度測定の発達、普及に伴ない、てんかん患者の薬物療法は、より合理的薬剤投与が指向されるようになってきている。この点、これまでの多剤併用療法における慢性中毒、薬物間相互作用、薬効評価などに関する種々の問題点が指摘され、単剤療法(モノテラピー)の利点が強調されるようになってきている。そこで今回、我々は、現在単剤療法下にある、てんかん患者の背景を多面的に調査し、果して単剤療法は可能なのかという命題の基礎的検討を行なった。対象となった母集団は、岡山大学神経精神科、国立岩国病院神経科を昭和57年1月1日から2月28日まで受診した外来てんかん患者、合計464名である。今回問題にする、単剤投与者は、100名(21.6%)であった。このうち当初より単剤治療下にあったものは37名(37.0%)、多剤併用から単剤にし得たものは63名(63.0%)であった。この100名を全体として現在の発作コントロール状況をみると、free 51%, mild 34%, moderate 13%, severe 2%で(分類基準はFolia Psychiat. Neurolog. Jap., 32: 447, 1978によった)あった。経過年数別に検討する上で、今回は、3年を適当年と考え、3年以上、以下で検討すると、前者15名、後者52名(但し1年未満の治療歴は除く)で、発作抑制は、前者でfree 9(60.0%), mild 4, moderate 2, severe 0であり、後者は25(48.1%), 21, 6, 0であった。3年以上モノテラピーで発作の完全抑制をみているものの9人のうち6人は原発性強直間代性てんかんであった。今回の調査は将来モノテラピーを施行する上での予備研究にすぎないが、我々の印象では、多剤併用から単剤に切り換えられる症例が意外に多いこと、単剤のみでも発作抑制率は、かなり高いことなどから、進んでモノテラピーを指向してゆく必要を感じた。更に詳細に、その次第を考察したい。

Ⅱ B-10 てんかん未治療例における Clonazepamの単独投与

1 新潟大学医学部精神科 2 国立寺泊療養所

3 県立新発田病院 4 県立小出病院 5 新潟市民病院

1 西田牧衛 内藤明彦 伊藤陽 三浦まゆみ

2 金山隆夫 3 吉田潤一 西鐵幹 4 本田建一

5 小田良彦 佐藤雅彦

未治療のてんかん患者に対してClonazepamを単独に投与し、てんかん発作に対するClonazepam独自の効果をしらべた。対象となつた症例は76例(男40例, 女36例)で、てんかん類型別の内訳は全般てんかん38例, 部分てんかん31例, 分類不能てんかん7例であつた。投与開始時年齢は平均14.9歳(1~61歳), 発症時年齢は平均11.1歳(0~59歳)であつた。投与方法は漸増法で行い、投与開始後6カ月目の一日平均投与量は、6歳未満は0.060 mg/kg, 6歳以上は2.2 mgであつた。効果判定は発作頻度の減少率をもつて行い、75~100%を著明改善, 50~70%未満を中等度改善, 25~50%未満を軽度改善, 0~25%未満を不変とし、発作頻度が増加した場合を悪化とした。発作頻度の減少率が50%以上の場合を有効として有効率を算出した。臨床効果の判定は投与開始後1カ月目, 3カ月目, 6カ月目, 12カ月目で行つたが、効果判定が可能な例数が最も多い6カ月目での結果を以下にしめす。

全般的効果判定では著明改善39例(59.1%), 中等度改善8例(12.1%), 軽度改善5例(7.6%), 不変7例(10.6%), 悪化2例(3.0%)で、有効率は71.2%であつた。てんかん類型別の有効率は原発全般てんかん73.7%(14例/19例), 続発全般てんかん60.0%(6例/10例), 部分てんかん73.1%(19例/26例)でおのおのの有効率の間には有意差はなかつた。国際分類にもとづく発作型別の有効率は、部分発作76.7%(23例/30例), 全般発作63.9%(23例/36例)であり、両者の有効率の間にも有意差はなかつた。複雑部分発作の有効率は78.7%で高値をしめし注目された。

脳波の改善は51例中21例(40.4%)にみられた。臨床効果と脳波の改善は必ずしも平行関係をしめさなかつた。